中等教科 現代文典 改訂 下卷

4a
815
大4

41881
教科書文庫
4
815
41-1915
20000
65457

資料室

4a
815
大4

大正四年二月二十八日 文部省檢定濟 中學校國語科 教科用書

文學博士芳賀矢一著

中等教科 現代文典 改訂

東京 合資會社 冨山房發兌

広島大学 教 65457 図書

中等教科 現代文典 改訂

下卷目次

第三篇 文の構造

第廿四章 單語、連語、文……一
第廿五章 主語、述語……三
第廿六章 叙述の種類 其の一……八
第廿七章 叙述の種類 其の二……一三
第廿八章 叙述の種類 其の三……一四
第廿九章 文主……一七
第三十章 文の要素の節略……二〇

第卅一章　修飾語の一……二三
第卅二章　修飾語の二……二五
第卅三章　單文……三三
第卅四章　句——複文……三九
第卅五章　節——重文……四八
第卅六章　文の性質上の種類……五三
第卅七章　係結の法則……五六
第卅八章　文の解剖……六〇

第四篇　正誤篇

第卅九章　假名遣……六六
第四十章　用言の活用……七七

第四十一章　活用連語……八〇
第四十二章　助詞……八八
第四十三章　係結……九三

附錄

文法上許容に關する事項……九五

目次終

中等教科

現代文典 改訂下卷

文學博士 芳賀矢一 著

第三篇 文の構造

第廿四章 單語、連語、文

〔一〇八〕犬、花、兵卒、學問、全國、師友、爲す、學ぶ、習ふ、明らかなり、霽る、

右はいづれも單語なり。單語は一つ一つの品詞にして一つ一つの概念を示すものなり。

【注意】助動詞助詞は他の詞に附屬して用ゐるものにして、概念を示すも

のとはいひ難し。然れども單獨の品詞として、尙之を單語と見做す。

〔一〇九〕散りたり　花よりも　麻の如く
器とならず　琢かざれば　道を知らず

右等はいづれも單語の集れるものにて連語なり。連語は單語の集りて成立ちたるものなれども、未だ纏りたる思想をいひあらはしたるものにあらず。

〔一一〇〕犬走る
兵卒戰ふ
花散りたり
紅葉は花よりも紅なり
天下麻の如く亂れたり
玉琢かざれば器とならず

人學ばざれば道を知らず
農業は一大進歩をなせり

右の如くいふときは、いづれも纏りたる一つの思想をいひあらはすことになる。單語の集りて纏りたる思想をいひあらはしたるものを文といふ。

第廿五章　主語、述語

〔一一一〕纏りたる思想卽ち文には必ず其の題目となるものあり。其の題目について何事かを叙述す。犬、花、兵卒、に對して走る、散りたり、戰ふ、の如き叙述あり、玆に始めて「犬走る」「花散りたり」「兵卒戰ふ」の如き文をなす。文の題目となるも

主語
1.体言
2.用言
3.

のを主語といひ、文の叙述をなすものを述語といふ。文は主語と述語との關係より成るものなり。故に文には少くとも一つの主語と一つの述語とを含まざるべからず。こにては犬、花、兵卒、は主語にして、走る、散りたり、戰ふは述語なり。

主語は多くの場合に於ては體言なり。

述語は多くの場合に於ては用言(又は活用連語)なり。

〔二二〕言ふは易く行ふは難し

教ふるは學ぶの半ばなり

體言の主語となることは普通なれども、右の如く用言の主語となることも多し。これ等は用言を體言の如く用ゐたるものなり。

述語
1.用言(活用連語)
2.助詞動
3.助詞

〔二三〕見るもの稀なり

信ずること篤し

右の如く、もの、こと、の如き體言と結付きたる連語にて、文の主語となること亦尠からず。かゝる場合には文法上もの、こと、等を主語と見做すべけれども、意義に於ては、連語全體にて主語の用をなすものあり。

〔二四〕正成は忠臣なり。

東京は日本の大都なり。

容貌花の如し。

用言の述語となることは普通なれども、右等の例の如く助動詞の述語となることも多し。

これは何の繪ぞ。

汝は正成の子か。

右等の例の如く、助詞にて文の述語となることもあり。

〔二五〕主語と述語との關係は、述語となるものの種類によりて其の性質を異にす。

(イ)動詞の述語となる場合には「何がどうする」といふ關係を示す。

風吹く　攘夷論起る

(ロ)形容詞又は助動詞如しの述語となる場合には「何がどんなだ」といふ關係を示す。

月明らかなり　月色銀の如し

(ハ)助動詞なり、たり又は助詞の述語となる場合には「何が何だ」といふ關係をあらはす。

日本は神國なり　東京は日本の都たり

これは梅の花ぞ

練習二十八、左の文の主語を指摘せよ。

イ　日月流水の如し。

ロ　世論紛々たり。

ハ　富家の子は世間の苦を知らず。

ニ　過ぎたるはなは及ばざるが如し。

ホ　農業の發達も一大頓挫をなせり。

ヘ　噴火口の形は漏斗狀をなせり。

ト　言はぬは言ふにまさる。

チ　自ら勞するものは天祐を得。

リ　河海は細流を擇ばず。

ヌ　日本は世界の樂土なり。東亞の以太利なり。

ル　花崗石とは御影石のことか。

第廿六章　叙述の種類其の一

（動詞の述語となる場合）

〔二二六〕動詞の述語となる場合には、述語のみにて叙述の十分なることあり。又は他の語を以て述語を補ひ、叙述の意味を完全ならしむることあり。

〔二二七〕月出づ

馬躍る

この二文は述語の動詞のみにて、述叙の完全なる文なり。

〔二二八〕勉強超ゆ

氷なる

右の二文は述語の動詞のみにては、「勉強が何に超ゆるか」「氷が何となるか」明瞭ならず。

勉強衆に超ゆ

氷水となる

の如く、「何に」「何と」の問に對する語を加へて、叙述始めて完全す。

〔二二九〕老母先たる　實朝殺さる

敵退却せしめらる

右の諸文も亦「何にどうせられたか」といふ實際の動作者無かるべからず。

老母子に先たる
實朝公曉に殺さる
敵我が軍に退却せしめらる

として、叙述始めて完全なり。

〔二一〇〕義經平氏を討つ
猿柿を落す
我が軍敵をして退却せしむ

右の諸文は「何をどうしたかといふ」關係なるを以て、述語の「どうかするもの」の外に、尚「どうかせられたもの」を加へて叙述の意味始めて十分になるものなり。

〔二一一〕教師生徒に文法を授く
賴朝義經をして平氏を討たしむ
義經賴朝より平氏を討たしめらる
米人華盛頓を大統領と定む

右の四文は述語の外、尚二つのものを補ひて、叙述始めて十分になるものとす。

すべて述語の意義を補ひて叙述を完全ならしむるものを補語といふ。

〔二一二〕補語は普通の體言なれども、用言にて體言の如く用ゐたるものも亦、補語として用ゐることあり。すべて主語となり得べきものは、補語としても用ゐるべきものと知るべし。

〔二一三〕天くらくなる
風俗野鄙になる
其の德を二三にす

右の如く、形容詞及び形容動詞のありに連らぬ本の形も亦、叙述の補語として用ゐる場合あることを知るべし。

【注意】辱くす、重くす、一にす、以てすの如きもこの類なれども、これ等は已に一つの動詞となりたりと見做して可なり。

練習二十九、左の文につきて、動詞の叙述を助くる補語を指摘せよ。

イ　艱難汝を玉にす。

ロ　丹砂を化して黄金となす。

ハ　文武の功臣に爵位を授く。

ニ　朱に交れば赤くなる。

ホ　刻苦して蘭學を修め蘭學者の泰斗となれり。

ヘ　西洋人は薔薇花を花の王といふ。

ト　利根川は一名を阪東太郎といふ。

第廿七章　叙述の種類其の二

（形容詞又は助動詞如しの述語となる場合）

〔二四〕花美し。

月明らかなり。

右等は述語のみにて叙述十分なる文なり。

〔二五〕六は三より多し

苛政は虎よりも猛なり

かくいふときは、補語加りて叙述を完全ならしむ。

〔二六〕月色銀の如し

容貌愚なるが如し

助動詞如しの述語となるときは必ず補語なかるべからず。

第廿八章　叙述の種類其の三

（たり、なり及び助詞の述語となる場合）

前の二章に學べる所は、動詞又は形容詞の述語となる場合なり。卽ち「何がどうする」「何がどんなだ」といふ二つの關係の文なり。助動詞又は助詞の述語となる場合には「何が何だ」といふ關係を示すものなり。

〔三七〕正成は忠臣なり

東京は大都會たり

右の例にて助動詞なり、たり、は述語なり。主語は正成、東京なり。この關係は「正成は何だ」、「東京は何だ」といふに在り。其の答として忠臣、大都會、の如き體言を示さゞるべからず。此の場合に於てはなり、たり、は文法上述語なれども、叙述の要部はむしろ其の體言に在りといふべし。

〔三八〕これは何ぞ。

鯨は魚か、

右の文にて助詞たるぞ、かは述語をなせり。この場合も亦前と同じく、「何が何だ」といふ關係を示す文にて、助詞の上には必ず體言なかるべからず。

〔三九〕以上說けるが如き助動詞なり、たり又は助詞の上に來りて叙述の要素をなす體言も亦、之を補語と見做す。

〔三〇〕かゝる場合の補語も、普通は體言にして、こと、もの、ため、所、

所以、などの體言に終る連語なること多し。

練習三十、左の文より形容詞、助動詞、助詞の叙述を助くる補語を摘出せよ。

イ　筆は劍よりも鋭し。

ロ　光陰は矢の如し。

ハ　海水は河水よりも重し。

ニ　太白月よりも明らかなり。

ホ　不義の富は浮雲の如し。

ヘ　世界は大學校なり。艱苦は良師友なり。

ト　過ぎたるはなほ及ばざるが如し。

チ　時は黄金なり。

リ　蝙蝠は鳥なりや、はた獸なりや。

第廿九章　文主

〔三三〕太郎は性質音樂に適ず

右の文にて適ずは述語にして性質はその主語なり。而して「性質音樂に適ず」といふ文を述語として、太郎は全文の主語たる如き觀あり。我が國の文にはかくの如き形式を有するもの少からず。特に全文の題目を取出して、それにつきて思想の叙述をなすなり。かく用ゐたる題目を文主といふ

〔三四〕兎は耳長し

我が軍は士卒勇敢なり

右の如く、形容詞、形容動詞の述語となる場合にも、文主を用ゐ

ること多し。

〔一三三〕落花心あり流水豈情なからんや

劍は勇の德あり。鏡は智の德あり。玉は仁の德あり。

右の如く、あり、なし、の述語となるときにも多く用ゐる。

【注意】全文を一文と取り、文主を其の主語として見れば、實際の主語は補語たるが如き形式をなす。

〔一三四〕代數學は余已に之を學べり、幾何學は余未だ之を學ばず。」

右の文は「余已に代數學を學べり、未だ幾何學を學ばず」といふ意味にて、その代數學、幾何學を特別に目立たせていはんが爲、上に掲げ出して、次に之をといふ代名詞にて繰返していひたるなり。

〔一三五〕太郎には敎師之に文法を敎へ、次郎には敎師之に讀本を敎ふ。

これも「何に」といふ問に對する補語を上に掲げ出し、之にと繰返したるなり。

以上〔一三四〕〔一三五〕の場合は文主と見做すべからず。

練習三十一、左の文につきて文主と主語とを示せ。

イ　益軒子なし。

ロ　象は體大なり。

ハ　粘土は其の粉細し。

ニ　都會の人民は見聞廣し。

ホ　人は皆惻隱の心あり。

ヘ　虎は其の性猫に類す。

ト　勇氣に乏しき人は成功すること難し。

チ　滿堂の紳士淑女袂をしぼらぬものなし。

第三十章　文の要素の節略

〔三三六〕文の主語、述語、文主及び述語の叙述を助くる補語は文を組立つるに大切なる部分なれば、文の要素ともいふべし。然れども文の都合によりては、之を省略すること亦尠からず。

〔三三七〕人の短をいふこと勿れ
枝を折るべからず
一寸の光陰輕んずべからず

右の如き命令をあらはす文には、主語を省くこと普通なり。

又

賴朝を征夷大將軍に任ず
詔して憲法を頒ち又皇室典範を定む
伏して惟るに
明日出發し明後日到着すべし

の如きは、皆主語を省略せる例なり。我が國文には主語を省略すること極めて多し。

〔三三八〕月色銀の如しこの良夜を如何に(せん)
伏して冀くは御購求あらんことを(乞ふ)
諺に曰く塵も積れば山と成ると(いへり)
生還するもの三人のみ(なり)
勉强は幸福の母(なり)

この年卽位す　年甫めて十三(なりき)

右の如く、述語を省略すること亦尠からず。

〔一三九〕實朝の(公曉に)弑せられしは承久元年なり

終日(友を)待てども遂に來らず

疑義あるものは(其の疑義を)(余に)質問すべし

右の如く、補語を省略すること亦尠からず。

練習三十二、左の文に適當なる要素を補へ。

イ　功五級に叙し、金鵄勳章及び年金三百圓を賜ふ。

ロ　花は櫻木、人は武士。

ハ　論より證據。

ニ　禍は內、鬼は外。

ホ　雲か、山か、呉か、越か。

ヘ　本規則は來る九月より實行す。

ト　大山元帥をして滿洲軍總指揮官たらしむ。

チ　本居宣長本姓は小津氏、幼名富之助。後に孫四郎又健藏と改む。伊勢國松坂の人。世々醫を業とす。二十七歳にして始めて國學に志し、賀茂眞淵の門に入り、古典を研究す。

第卅一章　修飾語の一

〔一四〇〕文には文の要素の外、文の要素を形容し、或はその意味を限定するに用ゐる語あり。之を文の修飾語といふ。

〔一四一〕修飾語には文中の體言を修飾するものあり。文中の用言及び副詞を修飾するものあり。

其の一、 形容詞的修飾語

〔一四三〕若き齢は重ねて來らず
富士山は皚々たる白雪を戴く

形容詞の若き、皚々たる、は體言の齢、白雪、を形容す。故に修飾語なり。

〔一四四〕眠れる兒は神の如し
吹く風寒からず

動詞の眠れる、吹く、は形容詞にひとしく、體言の兒、風、を修飾す。右の如く、用言(及び活用連語)の連體形は體言の上に添ひて體言を修飾するに用ゐる。

〔一四五〕我が國は神國なり
少年の時重ねて來らず

汝の答案を示せ
一杯の水は一車薪の火を消すこと能はず

右の如く、が、の、の助詞を伴なへる連語は亦形容詞にひとしく、體言を修飾するに用ゐる。

〔一四六〕我が國に於ける男女の數は男約三千五百萬、女約三千萬。」

右の於けるはもと動詞なれども、今は全く助詞の如く用ゐられ、「我が國に於ける」は「我が國の」といふに同じ。故に於けるに終る連語も亦、形容詞的修飾語と見なすべし。

文の中にて體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふ。

第卅二章　修飾語の二

其の二、 副詞的修飾語

〔一四六〕少年の時重ねて來らず

我が心始めて平なり

友人遂に來らず

右の重ねて、始めて、遂に、は副詞にして、來らず、平なり、の用言を限定す。故に修飾語なり。

〔一四七〕六時に出發し八時に到着す

一艦は香港へ向ひ、一艦は仁川へ向ふ

答案は毛筆にて認むべし

廣軌鐵道は青森より下關まで敷設せらるべし

六歳にして小學に入り二十二歳にして大學を卒業す

右の如く、に、へ、にて、より、まで、にして、其の外と、として、等の助詞を伴なふ連語は、其の性質副詞にひとしく、それ〳〵の用言又

は活用連語を修飾す。

【注意】一　より、への、までの、の如く、最後にのあるものはなほ形容詞的修飾語に屬す。

例、東京までの旅行　學者としての松平樂翁

二　補語も亦を、に、と、より、等の助詞を伴なふものなり。之を副詞的修飾語と區別する方法如何。副詞的修飾語と見做すべきは、大凡左の種類なり。

(イ)動作の起る場所、方角、時間又は其の度數に關するもの。

例、東京に着く　南方へ去る　六月に開く

二回に拂ふ

(ロ)動作をなす道具、材料に關するもの。

例、筆にて書く　机は木にて作る

(ハ)動作の方法に關するもの。

例、趣味自然に生ず　突然として來る　何心なしに行く

三　秋草爛熳として開く　櫻花奇麗に咲きたり。

右等は形容動詞の文の中間にて、に、として、となるものなれば、修飾語に非ず。

文の中にて用言及び副詞を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

〔一四八〕六歳小學に入り二十二歳大學を卒業す

此の時大勢なほ定まらず

風雨の夜兄弟牀をならべて千古の懷を叙す

翌朝戰場が原を横ぎりて湯元に向ふ

次の日東照宮に詣づ

三月十七日釜山港に舟を浮べ四月四日大阪につく

惡疫流行の際ことに衞生に注意すべし

天地開闢以來君臣の分自ら定まれり

副詞的修飾語の下には、右等の如く助詞を全く用ゐざることと多し。

〔一四九〕今日の事情に於ては甚だ困難なり

何の理由を以て之を拒絶するか

右の於て、以て、の如きはもと動詞なれども、今文には全く助詞の如く用ゐ、副詞的修飾語につくこと多し。

〔一五〇〕朝の六時に出發し夜の八時に到着す

答案は細き毛筆にて認むべし

靜に眠れる兒は神の如し

右の黑點を附したるものは修飾語を更に修飾したるものなり。修飾語の中、體言なるは形容詞的修飾語に修飾せられ、修飾語の內の用言又は副詞は、副詞的修飾語に修飾せられ、修飾語に修飾語を加へて文は次第に複雜となるなり。

〔一五一〕左の例により、簡單なる文が種々の修飾語を加へて、次第に複雜になりゆく樣を知るべし。

1 猫鼠を捕ふ

2 小き猫大なる鼠を捕ふ

3 小き黑毛の猫大なる白き鼠を捕ふ

4 禪寺の小き黑毛の猫緣の下の大なる白き鼠を捕ふ

5 禪寺の甚だ小き黑毛の猫緣の下の極めて大なる白き鼠を巧に捕ふ

6 隣の禪寺の甚だ小き黑毛の猫緣の下の極めて大なる白き鼠を最も巧に捕ふ

7 此の頃時々隣の禪寺の甚だ小き黑毛の猫わが家の緣の下の極めて大なる白き鼠を最も巧に捕ふ

右の例につきて、一々の修飾語がいづれの語を修飾するかを檢せよ。

〔一五二〕右の如く、修飾語の上に修飾語を加ふれば、尙いくらにても附加することを得べし。然れども實際の文には、かくの如く多くの修飾語を添ふること稀なり。

修飾語は修飾せらるゝ語よりも上に在るものとす。

練習三十三、左の簡單なる文に、種々の修飾語を加へよ。

イ　犬走る。

ロ　太郎書を讀む。

練習三十四、左の文の形容詞的修飾語、副詞的修飾語を指摘せよ。

イ　工場より歸り來るアンデーをして、翌朝は旭の如き希望を以て喜び勇みて、再び工場へ驅け向はしめたり。

ロ　莊嚴の極、平和の至。凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱にたゝずむを覺ゆ。

ハ　見よ見よ。木々の綠も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、鷄の聲も、空の色も、みな自ら憂世のものにあらず。

第卅三章　單文

〔一五三〕猫　鼠を　捕ふ

隣の寺の甚だ小き黑毛の猫緣の下の甚だ大なる白き鼠を最も巧に捕ふ

右の二文は長さに於ては非常に相違あれども、主語は猫、述語は捕ふにて、「何がどうする」といふ關係、即ち主語と述語との關係はたゞ一回成立せるのみ。後者は修飾語を加へて、文の形の複雜になれるに過ぎず。

〔一五四〕猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎は哺乳獸なり。

右の文には主語猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎、の八つあり。之を書きわけて、別々の述語を有せしむれば、

猫は哺乳獸なり
鼠は哺乳獸なり
狐は哺乳獸なり
馬は哺乳獸なり
牛は哺乳獸なり
象は哺乳獸なり
獅子は哺乳獸なり
虎は哺乳獸なり

の八文となる。然れどもこゝには之を引纏めて、八つの主語

に一つの共同述語を有せしめたるものなり。この關係は「何と何とが何である」なり。

〔一五五〕農夫は耕作し、收穫し、租税を納む。

右の文の主語は一つなれども、述語は耕作す、收穫す、納む、の三つあり。之を別々に書きわくれば、

農夫は耕作す
農夫は收穫す
農夫は租税を納む

の三文となる。然れどもこゝには之を引纏めて、共同の主語を有せしめたるものなり。この關係は「何がどうして、どうして、どうする」なり。

〔一五六〕余は學校にて修身、國語、英語、理科、算術、圖畫、體操、唱歌を學

ぶ。

父は財産を太郎、次郎、三郎、四郎、五郎に讓る。

右は多くの補語を有する例なり。この關係は「何が何を何と何と何とにどうする」なり。

〔一五七〕太郎は詩文を甲先生に學び、圖畫を乙先生に受け、音樂を丙先生に習ふ。

右は補語、述語ともに二つ以上を有する文の例なり。

〔一五八〕兄と弟とはともに勞働し、ともに勉强す。

右は共同主語が共同述語を有する文の例なり。

〔一五九〕以上〔一五四〕より〔一五八〕に至るまでの例を見よ。主語、述語、補語等の數の多少に係らず、主語と述語との關係は、文法の形式上、卽ち文を構成する形式に於てはいづれも唯一回成立せるものなり。例へば〔一五七〕の例にていへば「太郎が、詩文を甲先生に學んで、繪畫を乙先生に學んで、音樂を丙先生に學んだ」といふことにて、「何がどうする」といふ文法上の構造は唯一回成立てるのみ。

かくの如く、主語と述語との關係文法上の形式に於て唯一回成立せるものを名づけて單文といふ。

〔一六〇〕前の〔一五五〕〔一五七〕〔一五八〕の場合の如く、多くの共同述語を有する場合に於ては、最後の述語のみ適當なる終止形を以て結び、其の他はすべて連用形に置くものとす。〔一五五〕〔一五七〕〔一五八〕の例を見て之を知るべし。

〔一六一〕(イ)數學を復習し、次に讀本を復習したり

(ロ)第一大隊をして甲地に向ひ、第二大隊をして乙地に向

はじむ

(ハ)十六時間の戰鬪中一滴の水も飲まず、一粒の糧食も食はざりき

(ニ)第一大隊をして甲地に向はしめ、第二大隊をして乙地に向はしむ

(ホ)その德行仰ぐべく、貴むべし

右の例を見よ(イ)(ロ)は助動詞を繰返さざるもの。(ハ)(ニ)(ホ)は助動詞を繰返したる例なり。

練習三十五、左の單文の主語、述語、補語を指摘せよ。

イ　動物は互に生存を競爭し、或は居處を爭ひ、或は食物を爭ふ。

ロ　空中の水蒸氣凝結して、或は風となり、或は雪となり、或は霰となり、或は雹となる。

ハ　父母や我を生み、我を養ひ、我を長せしめ、我を敎ふ。

ニ　横須賀、吳、佐世保、舞鶴は日本の軍港なり。

ホ　誠實と勤儉とは商人の二大德行なり。

ヘ　木曾山には檜、欅、松、槇、杉の良材多し。

ト　水戸中納言光圀卿は頼房卿の第三子、東照宮の御孫なり。

チ　余は毎朝六時に起き、七時に朝食を終へ、八時より午後三時まで學校に學び、四時より六時まで運動し、七時に晩餐を喫し、八時まで街上に散歩し、九時より十時まで復習し、十時半眠に就く。

第卅四章　句——複文

(一六三)(イ)秋風吹く

(ロ)猫鼠を捕ふ
(ハ)余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る

右等はいづれも單文なり。

〔一六三〕(イ)「秋風吹け」ば。
「秋風吹け」ども。
「秋風吹く」に。

(ロ)「猫鼠を捕ふれ」ば。
「猫鼠を捕ふれ」ども。
「猫鼠を捕ふる」に。

(ハ)「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸る」が。
「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸れ」ども。
「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸る」に。

右の如く、文の述語をば、ども、に、其の外とも、が、を、のみ、すら、は、もの、や、等すべての助詞に連らしめて、他の文の一部分となすことを得。

かくの如く、文の獨立を失ひて、他の文の一部分となれるものを句といふ。

〔一六四〕「秋風の吹く」時。
「猫の鼠を捕ふる」方法。
「余の六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸る」習慣。

右の如く、體言の上に連ねて、文全體を體言の修飾語となす場合も亦句なり。

〔一六五〕句の用法に種々あり。

詩人は「秋風の吹く」を悲む

「猫の鼠を捕ふる」は甚だ巧なり

君は「余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る」を知れり

右は文の主語又は補語として用ゐたる例なり。

句はかくの如く、文の要素たる主語、補語として用ゐること多し。

〔一六六〕魚釣は「秋風の吹く」時をよしとす

「猫の鼠を捕ふる」方法を見よ

君は「余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る」習慣を知るか

右は句を文中の體言の修飾語、卽ち形容詞的修飾語として用ゐたる例なり。（第三十一章參照）

句はかくの如く、文中の體言を修飾する形容詞的修飾語として用ゐること多し。

〔一六七〕「秋風吹け」ども木葉落ちず

「猫鼠を捕ふる」に、犬夜を守らず

「余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸れ」ども、君は終日家に在り

右の如く用ゐるときは、上の文は副詞的修飾語となりて下の文の述語を修飾することとなる。（第三十二章參照）

句はかくの如く、文中の用言を修飾する副詞的修飾語として用ゐること多し。

〔一六八〕

(イ)
秋風の吹く時の初には
猫の鼠を捕ふる方法の巧拙を
余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る習慣の可否は

(ロ)
秋風の吹くに際し
猫の鼠を捕ふるにあたり
余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る習慣あるより

右等は附線せる部分全體として、(イ)は形容詞的修飾語たり(ロ)は副詞的修飾語たるものなり。故に句は更に大なる修飾語の一部分として其の中に含まるゝことあり。（一五一節參照）

〔一六九〕以上述べたる如く、句は文の要素としても用ゐ、要素の修飾語としても用ゐ、修飾語中の語の修飾語としても用ゐるが故に、句を含みたる文の形式は非常に複雜になることを得べし。

〔一七〇〕詩人は「秋風の吹く」を悲む

右の如き句を含みたる文につきて、主語と述語との關係を見よ。詩人の主語と悲むの述語との間に「詩人が悲む」といふ主語、述語の文法上の關係一回已に成立せり。然るに句の中にも亦「秋風が吹く」といふ關係一回成立するを以て、この場合には「何がどうする」の關係は二回まで成立せり。故に最早單文にあらず。

月満つれば缺く

右の例にては「月満つれば」の句あれども「缺く」の主語も亦「月」にて「月がどうする」といふ關係なれば尚單文といふべし。

一つ以上の句を含みて、主語と述語との文法上の關係二回以上成立せるものを複文といふ。

〔一七〕正成答へて、「陛下願くは御心を安んじ給へ」と奏す

右の如く、單文の中に獨立せる單文を含めるものも亦複文なり。

練習三十六、左の例につきて句を指摘せよ

イ 猿の木に上るは甚だ巧なり。

ロ 小兒の喫烟するは發育に害あり。

ハ 瞥見す大魚の波間に跳るを。

ニ その響は萬雷の吼ゆるが如し。

ホ 波の起る原因は風と地震との二つなり。

練習三十七、左の例につきて單文と複文とを區別せよ。

イ 樹靜ならんと欲すれども風やまず。子養はんと欲すれども親待たず。

ロ 風吹きすさみて波を起す。

ハ 風吹きすさめども波立たず。

ニ 謙信兵を帥ゐて川中島に陣す。

ホ 金剛石も磨かずば玉の光は添はざらん。

ヘ 千丈の堤も螻蟻の穴より崩る。

ト　尺蠖の伸びんとするやまづその身を屈す。

第卅五章　節—重文

〔一七二〕秋風吹く　木葉落つ
猫鼠を捕ふ　犬夜を守る

右は四つの單文なり。

秋風吹けども木葉落ちず
猫鼠を捕ふれども犬夜を守らず

右の如くいへば二箇の複文となること前章に學べるが如し。

秋風吹き木葉落つ
猫は鼠を捕へ犬は夜を守る

右の如くいふときは、上の文は獨立を失ひて、更に大なる文の

一部分となること、句の場合に似たり。然れども、この場合には上の文は下の文の附屬となならず、下の文と相對して同等に並立せり。

かくの如く、文中にありて同等に並立するものを文の節といひ、二箇以上の節を含む文を重文といふ。

【注意】上の文助詞のてに連る場合には下の附屬となるか、又は對立するか明瞭ならざることあり。上の文原因にして、下の文その結果なる場合は、附屬句なりとおもふべし。口語にて「何がどうすると」「何がどうすれば」などいひて明瞭なる場合は、皆附屬句なり。

〔一七三〕天は高く地は低し
月は明らかに星は稀なり

柳は緑に花は紅なり

大河滔々として連山巍峨たり

右はいづれも形容詞を述語とせる二つの文節を含みたる重文なり。この例によりて、形容詞の述語として上の文節に來るときは、普通の形容詞に連用形たるくの形、形容動詞はありに連らぬ本の形をあらはすことを知るべし。

〔一七四〕余彼を愛し彼亦余を愛せり。

去年は中學校の選手優勝旗を得今年は師範學校の選手優勝旗を得たり。

右等の例にて文節を重ぬるに際して、時の助動詞は最後の文節に置かるゝことを知るべし。

〔一七五〕彼も之を知らず余も亦之を知らざりき

帆は風に取られ楫は波に碎かる。

陸軍は第三軍をして旅順に向はしめ海軍は第二艦隊をして浦鹽斯德に向はしめたり

太郎は算術を復習すべく次郎は文法を復習すべし

頭は猿の如く尾は蛇の如し

右等の例にて打消、受身、使役、比較の助動詞の如きは、各文節毎に繰返すことの普通なるを知るべし。

〔一七六〕春來れども花咲かず、秋立てども葉落ちず

右の各文節は複文を重ねたるものも亦重文なり。

練習三十八、左の文の文節を示せ。

イ　鳥空に舞ひ、魚淵に躍る。

ロ　金剛石は萬物の中最も硬き寶石にして、其の價も亦最も貴し。

ハ　富士山は高山にて、其の形白扇を倒に懸けたるが如し。

ニ　水落ち、石出づ。

ホ　兩岸の綠樹鬱蒼として目を樂ましめ、大江の碧流滔々として心を洗ふ。

〔一七七〕以上學べる所によりて、文は構造上より左の三種に分ることを知る。

一、單文

二、複文

三、重文

〔一七八〕吾等は單文のみにて如何なる思想をも言ひあらはし得べし。然れども單文のみを連用すれば變化に乏しく、又却

りてくだくだしくなる虞あり。故に或は複文を用ゐ、或は重文を用ゐ、三種の文を入交らしめて變化を多くす。文章の美こゝに於てか在り。

第卅六章　文の性質上の種類

文は性質によりて左の四種に分つことを得。

〔一七九〕西鄕木戸大久保を維新の三傑といふ

地球は一年を以て太陽を一週す

かくの如く、すなほに思想を叙述し、事柄を說明したる文を平叙體の文といふ。

〔一八〇〕汝は月の盈缺する理由を知るか

余を咎むるものは何人ぞ

三と五とを加へて其の和幾何
天下何の地か山なからん何の處か月ならん
右等の如く、疑問又は反語の意を含む樣に書きたる文を疑問體の文といふ。

〔一八一〕辨當持參にて來れ
片時たりとも父母の厚恩を忘るべからず
己の長をいふこと勿れ人の短をいふこと勿れ
右の如く、命令の意を示す樣に書きたるものを命令體の文といふ。

〔一八二〕嗚呼悲しいかな
歎ずべきかな
右の如く、感動の意を示すものを感動體の文といふ。

〔一八三〕豈それ然らんや
誰か之を知らんや
右の如く、疑問文の下に更に感動の助詞を入れて感動體の文となしたるものあり。

〔一八四〕若し果して然らんか これ實に憂ふべきの至なり
一月の軍費一億圓とせんか 一年にては十二億圓なり
右の如く、疑問文を用ゐて單に條件の意をあらはすことあり。

〔一八五〕歎ずべきの至ならずや
嗚呼これ我が友某氏の遺稿なるか
右の如く、疑問文にて感動の意を示すことあり。

〔一八六〕吾等は平叙文のみを以てあらゆる思想をいひあらはすことを得べし。例へば「月の盈缺する理由を知るか」を平叙

文にていはんには「汝の月の盈欠する理由を知ることを疑ふ」の如くいひ得べく、「來れ」を平叙體の文にていはんには「余は來ることを汝に命ず」といひ得べし。然れども平叙體の文のみにては、單調を免れず。この四體の文を混合し變化始めて多し。これ語の妙用なり。文の妙なり。

第卅七章　係結の法則

〔一八七〕普通の順序に從へば、述語たる用言（若しくは助動詞）、文の最後に來るものとす。但しその結び方、文體によりて異なり。之を係結の法則といふ。

〔一八八〕正成は忠臣なり。
　これぞ金州の城門なる。

吹來る風ぞなまぐさき。
　我こそは無官の大夫敦盛なれ。
　好きこそ物の上手なれ。

右はいづれも平叙體の文なり。こゝに左の規則を生ず。

平叙文に於ては

(一)述語は終止形を以て結ぶを通例とす。
(二)上にぞの助詞あるときに限り、述語は連體形を以て結ぶ。
(三)上にこその助詞あるときに限り、述語は已然形を以て結ぶ。

〔一八九〕誰か鳥の雌雄を知らん。
　之を知らぬ人やある。

疑問文にては「ぞ」「か」「や」の如き疑問助詞の、最後にあらはる

ることあり。然らずして、述語が文の最下にあるときは、常に連體形を以て結ぶものと知るべし。

疑問の文には「ぞ」の助詞、述語の上に來ることなく、又「こそ」のあらはるゝことなし。

〔一九〇〕涙あるものは泣け。

己の長をいふこと勿れ。

右の如く、命令文には述語の最後に來るとき命令形を以て結ぶ。命令文には、よ、な、など命令の助詞最後に來ること多し。可しはもと推量の助動詞にして、轉じて命令の助動詞となりたるものなれば、これは尙平叙文の如く終止形にて結ぶものとす。

すべて命令の文には「ぞ」「や」「か」「こそ」のあらはるゝことなし。

〔一九一〕嗚呼甚しいかな。

右の如く、感動體の文は感動の助詞最後に來る。

〔一九二〕雪ぞ降出でたれば、……

この心得こそ何人も守るべきに、……

右の如く、句の中にあらはれたるや、か、ぞ、こその類は、最後の文の結び方に何等の影響をも及すことなきものとす。

練習三十九、左の文の係結を指摘せよ。

イ　人こそ知らねかわく間もなし。

ロ　民を愍ませ給ふ御心の深さぞこの一事にて知られたる。

ハ　誰かある、燈もて。

二　山河廣しといへどもいづれか王土にあらざらん。

ホ　この種の學者こそ眞に國家の寶なれ。

第卅八章　文の解剖

〔一九三〕吾等はこれ迄文の構造につきて學びたり。今その知識を應用して、左に一二の文を分解すべし。

口徑十二吋砲の彈丸は三千やーどの距離に於て、よく十六吋のくるつぶ鋼鐵板を貫く。

文を分解するには

第一　その主語と述語とを見るべし。この文の主語は彈丸にして述語は貫くなり。

第二　主語、述語、以外の文の要素を見るべし。この文の述語

貫くは他動詞にて、その叙述を助くる補語はくるつぶ鋼鐵板なり。

第三　主語の修飾語を見るべし。この文の主語彈丸の修飾語は口徑十二吋砲のといふ形容詞的修飾語なり。

第四　述語の修飾語を見るべし。この文の述語貫くの修飾語はよくの副詞と三千やーどの距離に於ての副詞的修飾語となり。

第五　他の要素卽ち補語の修飾語を見るべし。この文の補語くるつぶ鋼鐵板の修飾語は十六吋のの形容詞的修飾語なり。

第六　この文は主語と述語との關係一回のみ成立したれば單文なり。

第七　この文は性質よりいへば平叙體の文なり。

〔一九四〕夜は圓月の朦朧として瀧の上にのぼるを見たり。

第一　この文の述語は見たりの動詞なり。主語は見たる人、例へば「余」にて、こゝには省かれたり。かく省かれたる場合には補ひて考ふべし。

第二　見たりの述語を助くる補語は「圓月の朦朧として瀧の上にのぼる」の句なり。

一　この句の主語は圓月なり。述語は朦朧としての形容詞とのぼるの動詞となり。

二　この句には補語なし。

三　この句の主語圓月には修飾語なし。

四　のぼるの述語には瀧の上にといふ修飾語あり。

五　補語なければ、その修飾語なし。

六　この句は主語一つ、述語二つある單文の句となれるものなり。

七　この句は平叙體の單文の句となれるものなり。

第三　この文の主語は省かれたれば主語の修飾語なし。

第四　この文の述語の修飾語は夜はといふ副詞的修飾語なり。

第五　この文の補語たる句には修飾語なし。

第六　この文は句を含みたれば複文なり。

第七　この文の性質は平叙體の文なり。

〔一九五〕義家は奈古曾關外落花の歌を詠じ、謙信は能州の陣營に明月の詩を賦す。

第一　この文は義家の主語に對して詠じの述語あり。謙信の主語に對して賦すの述語あり。二つの文節對等に竝立せり。

第二　詠ずの述語を助くる補語は歌なり。

第三　義家の主語には修飾語なし。

第四　詠ずの述語には奈古曾關外の副詞的修飾語あり。

第五　補語歌の修飾語には落花の形容詞的修飾語

第二　賦すの述語を助くる補語は詩なり。

第三　謙信の主語には修飾語なし。

第四　賦すの述語には能州の陣營にの副詞的修飾語あり。

第五　補語詩の修飾語には明月の形容詞的修飾語

あり。

第六　この文は各單文より成れる二箇の文節を含みたる重文なり。

第七　この文は各平叙體の文より成れる二箇の文節を含める平叙體の文なり。

かくの如く、文を分解するを文の解剖といふ。

第四篇　正誤篇

第卅九章　假名遣

〔一九八〕

(1) 飛び　飛んで
讀み　讀んで
死に　死んで
(2) 勝ち　勝つて
取り　取つて
食ひ　食つて
(3) 問ひ　問うて
(4) 書き　書いて

指し　指して

動詞よりて(或はたり)につゞく時は、(1)の如く、び、み、にはん、と撥ぬる音に轉じ、(2)の如く、ち、り、ひは促る音に轉じ、(3)の如くひは長音にも轉じ、(4)の如く、き、しは母音に轉ず。これを動詞の音便といふ。

次の例の誤謬を正し、その理由を述べよ。

1 舌を嚙むで死す
2 飛むで火に入る夏の蟲
3 子を思ふて眠らず
4 三度訪ふて遂に逢はず
5 天を仰ひで歎ず
6 況や余におひてをや

〔一九七〕悲しきかな　悲しいかな

之を久しくす　之を久しうす

右の如く、形容詞の活用のき、くも亦音便にて母音のいうに變ず。故にかゝる場合に次の如くひ、ふを用ふるは誤なり。

1　嗚呼悲しひかな

2　昨日は御來駕を辱ふし謝し奉り候

3　天句踐を空しふすること莫れ

〔一九八〕つきたち　ついたち

あきびと　あきうど

てみづ　てうづ

右の如く、名詞にも音便にていうとなれるものあり。

かゝる場合には其の本の語を考へ、音便なりと知らば、必ず母

音のいうを用ゐるべし。いの代りにひ、或はゐ、うの代りにふを用ゐるべからず。

次の例に就いて考へよ。

1　きさゐの宮(后の宮)

2　やひば(刃)

3　なかふど(仲人)

4　しろふと(素人)

5　かふべ(神戸)

6　こふぢ(小路)

音便は發音の轉じたるにつれて、假名をも書きかふることの認められたるものなり。

〔一九九〕燈消えたり　草を植ふたり　困難に堪へよ。

え、ゑ、へ、の三つの假名は今皆同樣に發音す。然れども是等は音便と認められず。昔の發音は已に變りながら、假名をば書分くべきものなり。

（いの音）過を悔いよ　兵を率ゐて進む　學校に通ひたり。

（うの音）松の木を植う。　餅を食ふ。

（えの音）國榮えん　民飢ゑたり　字を習へ。

右の如き假名の書分は、よく動詞の活用を記憶せば誤ることなし。即ち何活用の動詞にて、何行に活用すといふことを忘れずば、其の假名明瞭なるべし。例へば悔ゆは打消に悔いず。となれば上二段なりと知り、悔ゆ、悔ゆとや行に活くことを知らば悔いといの假名を書くべく、悔ひ、悔ゐなど書くことの誤なるを知るが如し。すべて動詞の活用は一行の中にのみ活用するものなれば、類推して知るべし。但し〔一九六〕の音便の場合を併せ考ふべし。

1 父母は我を生み我を養えり
2 勳章を賜わる
3 恩を受けては必ず報ひよ
4 視れども見ゑず、食えども其の味を知らず
5 心配に堪えず
6 絶へず新しき事を研究す
7 知らざることは人に問うべし

〔一九〇〕感じたり　信ず。べからず

其の行に恥ぢよ　山に攀ぢ川を渡る

じとぢ、ずとづとは混じ易き假名なり。但し動詞の活用と

してあらはるゝものは、左行變格活用と、まず(混ず)の一語との外はすべてだ行なりと知るべし。

1 戸を閉じよ
2 學力衆に抽んず
3 その行感づるに堪へたり

(三〇一) 願ねがひ　煩わづらひ　占うらなひ
謠うたひ　戰たゝかひ
悔くい　報むくい
榮さかえ　費つひえ
恥はぢ

右等の如き動詞の連用形より名詞となれるものの假名遣は、すべて動詞の活用を知れば誤ることなし。

1 國のさかゑ
2 師のをしえ
3 おひの身
4 わらい顔

(三〇二) 鏃やじり(矢、尻)　眦まなじり(目の尻)
諺ことわざ(言、業)　所行しわざ(仕、業)
基もとゐ(本居)　鳥居とりゐ
祖父おほぢ(大、父)　伯叔父をぢ(小、父)
弦ゆみづる(弓、弦)

右の如き複合語の假名遣は之を組立つる本の語に分けて考ふれば會得せらるゝこと多し。

1 いしずえ(礎)

2 みかずき(三日月)
3 にくずき(肉附)
4 おば(伯母)
5 いなか(井中)
6 ことはり(斷)
7 やまはり(山割)
8 ひじりめん(緋縮緬)
9 むらさきづいしやう(紫水晶)

〔二〇三〕 恥(名詞) 恥づ(動詞) 恥づかし(形容詞)
男(名詞) をゝし(形容詞)

右の如く、一つの品詞の假名遣を知れば、關係せる他の品詞の假名遣は、自ら明らかなる場合多し。

疊字
踊字

1 据(ゐ・う) すはる(坐)
2 植(ゑ・う) うへ木 うはる(植)

〔二〇四〕 鱸 すゞき　硯 すゞり
鼓 つゞみ　葛籠 つゞら

右の如く、重りたる音は大抵同字の音なり。

1 つずり(綴)
2 すづし(涼)
3 ちじみ(縮)
4 つずまやか(約)

練習四十、　左の文中に假名遣の誤あらば正し、併せてその理由を述べよ。

イ　禮を厚ふし、辭を卑ふす。

ロ　願ふても無き仕合。

ハ　殊に衆美を聚め、群を拔ひて立てるを京都とす。

ニ　いかにすぐれし想をか沈める波に湛ゆらん。

ホ　世の中に絶へて櫻の無かりせば春の心はのどけからまし。

ヘ　箱根路をわれ越へくれば、伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ。

ト　肥へふくれたる蛙の、物まち顏に空うちにらみて。

チ　口を衝ゐて浮び出ずる歌に興がりし事もありき。

リ　こらえず馬より下りて、かなたに向い平伏なし。

ヌ　など此の年月の仇報はんと思はざらん。

ル　今を昔にかえさんすべもかた絲の、よりすぐれたる世こそかへすべも是非無けれ。

第四十章　用言の活用

〔三〇五〕動詞の活用は、四段活用を除く外は、口語と文語との間に多少の相違あること、上卷に於て學べるが如し。若し口語に慣れたる活用を以て文語を綴らんか、之が爲め誤を來すこと多し。今其の主要なるもの二三をいはん。

口語にては上二段、下二段の活用はすべて上一段、下一段と同じくなれり。落つ、棄つ、の連體形は口語にては、落ちる、落ちれ、棄てる、棄てれなれども、文語にては落つる、落つれ、棄つる、棄つれ、なり。故に左の如く書くは誤なり。

1　ニュートンは林檎の落ちるを見て引力の理法を發見せり

2　棄てる神あれば拾ふ神あり

〔二〇六〕口語にては終止形と連體形との區別無くなれり。（〔八〇〕注意參照）口語の區別なきに慣れて、文語の區別あるを忘るるなかれ。其の誤れる例左の如し。

1　生る時より死ぬ時まで

2　大荷物を小馬に載す人あり

3　國家の繁盛を致する以所なり

4　後の不幸を來する基なり

〔二〇七〕

1　河豚は食ひたし命は惜しゝ

2　あら恐ろしゝ因果覿面（テキメン）

かくの如く、重ぬるしゝは誤なり。（〔七三〕節參照）

【注意】文法上許容に關する事項第二項參照。

練習四十一、左の文の活用の誤を正せ。

イ　未來の淨土を欲求する一念を益（エキ）すことなかりしか。

ロ　一層巧に譯さすば原意を失ふべし。

ハ　死すべき時に死さゞれば死ぬにまさる恥あり。

ニ　瓦となりて全からんよりは玉となりて碎く亦快からずや。

ホ　更け行く夜のいとおそろしゝ。

ヘ　天は自ら助けるものを助く。

第四十一章　活用連語

〔二〇八〕動詞の助動詞に連り、助動詞の更に他の助動詞に連るには、其の間に一定の規則ありて、整然として紊れず。

(イ)
讀ま
有ら
起き
棄て
見
蹴
感ぜ
來(こ)
ん

(ロ)
讀み
有り
起き
棄て
見
蹴
感じ
來(き)
たり。

未然形＝ん

連用形＝たり

(イ)の動詞の活用形はすべて未然形にして、(ロ)のはすべて連

四段・奈變・左變
ぬ・ぶ・む に連ふに
え列の音を含

用形なり。故に助動詞のんに連るには未然形よりすべく、たりに連るには連用形よりすべきことを知る。之を助動詞の方よりいへば、んは未然形を受くるもの、たりは連用形を受くるものといふべし。かくの如く、一つ〳〵の助動詞には、それ〳〵何の活用形を受くるといふ定ありて、助動詞と助動詞と重り合ふ場合にも、亦此の規則に外れざるなり。

余等は自然に之を記憶して「讀まん」「有らん」を「讀むん」「有りん」ともいはず、「讀みたり」「有りたり」を「讀またり」「有らたり」ともいふことなし。いくつも助動詞の連結する場合も亦然り。今左に連結の誤り易き場合二三を擧ぐべし。

〔二〇九〕　書けり。　死ねり。　感ぜり。

右の如く、完了時の助動詞「り」は四段活用、奈行變格活用、左行

變格活用に限りて、其のえ列の音より連るものなり。然るを下二段活用にも亦え列の音あるを以て、堪へり、受けりの如く誤り用ゐることあり。

【注意】良行變格より、「居れり」「異なれり」と用ゐるをも從來は誤とせり。

（附錄文法許容に關する事項第一項及び第四項を參照せよ。）

〔三一〇〕及第しき　及第せし人　及第せしかども

時の助動詞「き」は連用形を受くるものなれども、左行變格活用の動詞に限り、其の未然形よりし、しかの兩形に連ること右に示すが如し。故に及第しゝ人、及第しゝかども、など書くは誤なり。

四段活用の動詞より、このし、しかに連ぬるに押せし、殘せしなど書くは、左行變格活用又は左行下二段活用の接續と混同せるものなり。目下盛に行はる。

【注意】附錄文法許容に關する事項第八項を參照せよ。

〔三一一〕落つべし　聞ゆべし　醫すべし

「べし」「べからず」は良行變格及び良行變格と同樣に活用するものゝ外は、すべて右の如く終止形より連るものなり。然るを口語にて終止、連體の差別なきが爲「落つるべし」「聞ゆるべし」「醫するべし」などの如く連體形を誤り用ゐることあり。

〔三一二〕落つるなり　聞ゆるなり　醫するなり

落つるなるべし　聞ゆるなるべし　醫するなるべし

なりは連體形に連るものにて、從つて「なるべし」も亦連體形に連るべきものとす。然るを〔三一〇〕の場合と反對に、「落つなり」「落つなるべし」「聞ゆなり」「聞ゆなるべし」「感ずなり」「感ず

なるべし」の如く、終止形を誤り用ゐる事あり。

〔三三〕落つまじ　聞ゆまじ　醫ずまじ

「まじ」も「べし」と同じく終止形に連るものなり。故に「落つるまじ」、「聞ゆるまじ」、「感ずるまじ」など連體形を用ゐるは誤なり。「落ちまじ」「聞えまじ」など未然形を用ゐるも不可なり。

〔三四〕讀まる　起きらる　讀ます　起きさす
死なる　棄てらる　死なす　棄てさす
有らる　見らる　有らす　見さす
感ぜらる　感ぜさす

受身の助動詞にはる、らるの二つあり、使役の助動詞にはしむの外にす、さすの二つあり。いづれも未然形より連るものにして、る、すは未然形にあ列の音を有する動詞に連り、らる、さすは其の他の動詞に連ること右に示すが如し。（せらる、させらる。亦之に準じて知るべし。）

故に左行變格より受身、使役に續きて感動せらる、感動せさす、といふを當然とす。然るに近來は感動さる、感動さすの如く用ゐること多し。

【注意】附錄文法許容に關する事項第五、第六項を參照せよ。

使役の助動詞しむは亦未然形を受くるものなれば、「見しむ」「得しむ」といふべきを、今は「見せしむ」「得せしむ」といふこと多し。

【注意】得しむは附錄文法許容に關する事項第七項を參照せよ。

練習四十二、左の文の動詞助動詞連結の誤を正せ。（現今

許容せられたるものは其の旨を答へよ。

イ　世に傳へる朱文公の勸學の文、語簡にして意長し。

ロ　一旦名聲を落せしが後之を回復せり。

ハ　人情風俗は時代と國土とによりて異なれり。

ニ　本校所定の學科を修め正に其の業を卒へり。

ホ　尊王の論盛にして幕府遂に倒れり。

ヘ　一日も光陰を徒費しゝことなし。

ト　海外に輸出しゝ總額は三百萬斤に超えりといふ。

チ　一覽しし人は東の入口より退場すべし。

リ　品物に手を觸るゝべからず。

ヌ　この處塵芥捨てべからず。

ル　これ學生のするまじき所業なり。

ヲ　猥に出入するべからず。

ワ　或は風呂を涌かし、或は工場の蒸氣竈を熱する等、その便利數ふるべからず。

カ　敵は必ず夜襲を企つなるべし。

ヨ　敵の大隊は我が軍に包圍されて全滅したり。

タ　資金を給して其の好む所を研究させたり。

レ　法皇忠盛に仰せて之を射さしめらる。

ソ　希望者には出席することを得せしむべし。

ツ　舊規則は今年限廢止さる。新規則は明年一月より實行さるべし。

ネ　諸藩に詔して之を議さしむ。

ナ　平家の大軍は殆ど塵殺され、且戰ひ且退きて篠原成合に到り、返り撃つて大に戰ふ。

第四十二章　助詞

〔三五〕

1　田甫も流されて一粒の收穫さへなし

2　烏さへ恩を知る況や人をや

さへは口語と文語と用法を異にす。〔五二〕を參照して、右の例の誤を知れ。

〔三六〕

1　前に進め　東に行け

2　東京へ着く　君へ渡す

〔三七〕

に、へ、の區別は第十三章注意を參照せよ。

1　十五と三の自乘の和は幾何なるか

2　伊藤と佐藤の兄は同年なり

3　今朝より讀本と文法の半ばを讀みたり

4　日本人と西洋人の小供を比較すれば

以上はとを繰返さざるによりて誤謬の生じ易き場合なり。

【注意】第十三章の注意及び附錄文法許容に關する事項第十三項參照。

〔三八〕歸りたりといふ

見たる人なしとぞ

かくの如く、終止形に連るを普通とす。今文には「歸りたると」いふ「見たる人なきといふ」の如く書く人多し。

【注意】文法許容に關する事項第十二項參照。

〔三九〕ありや　なしや

汝は日本國民に非ずや。

これ等は疑問又は反語のやなり。こはすべて右に示せる如く、終止形より續くものとす。今は「あるや」「なきや」の如く連體形より續くること多し。

【注意】附錄文法許容に關する事項第十項參照。

あるか　なきか

汝は日本國民に非るか。

同じく疑問の助詞なれども、かは連體形よりつゞく。

〔二二〇〕いつ、幾許、何處、の如き疑問の詞上に在るときは、下にはかの疑問詞を用ゐる定にて、やを用ゐず。これも今文には亂れたり。

【注意】附錄文法許容に關する事項第十五項參照。

〔二二一〕とも、ども、は前と後とに背く時に用ゐること〔二〇七〕にいへるが如し。然るに今文にはもを用ゐて、之に代ふること多し。

1　三世の因果を身に引くも、なほ怨敵に報いんことを期せり。

2　後貧賤に陷るも毫も驚かず。

3　何の理由あるも返却せず。

4　悔ゆるも及ばず。

【注意】附錄文法許容に關する事項第十一項及び第十五項參照。

練習四十三、左の用言、活用連語に接續の誤あらば正せ。

（許容あるものは其の旨をことわるべし。）

イ　數日の旅行に過ぎざりしも、得るところは少からざりしと信ず。

ロ　八百と十五の差は幾何なるや。

ハ　少年の時學ばざれば老年に至りて悔ゆるとも及ぶべからず。

ニ　人は權利を有するとともに義務をも有す。

ホ　歲月は流るる如し。

ヘ　人と禽獸との區別は言語を有すと有せざるとに在りと論ずる人あり。

ト　出席せるや否やを檢して後問題を與ふべし。

チ　昔の行列の繪などに見ゆる美しき傘に、金紙の飾つけたるを從者に持たすもあり。

リ　線路に添へる電信線は悉く切斷せられて、北京、天津間の交通は通州を通過する一條の電線を存すのみ。

第十三章　係結

〔三三〕平敍文にては、ぞ。の下は連體形を以て結び、こそ。その下は已然形を以て結ぶ。係結の誤は近世文には頗る多し。改めたきものにこそ。

練習四十四、左の文の係結の誤を正せ。

イ　跡白浪と逃失せける。

ロ　說こそ陳腐なり、文章は見るべし。

ハ　この種類の學者こそ眞に國家の寶にして、國家は大に優遇の道を講ずべけれ。

ニ　好きこそ物の上手なり。

ホ　花ぞむかしの香には匂ひぬ。

ヘ　かれこそ時鳥なりと敎へらるゝを聞きて、

ト　馬なりし人はとく着きて我等を迎へたりしこそ、物語めきてをかしかりし。

中等教科

現代文典　改訂下卷　終

附錄　文法上許容に關する事項

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサヤマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五、「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル

評サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ヲ動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ
如何ニ批評セラルルトモ
强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ
嘲弄セラルヽト思ヒテ
終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ
萬人皆其德ヲ稱ヘケルトヅ

十三、語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花
宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ
史記ト漢書ノ列傳ヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン
幾何ナルヤ
如何ナル故ニヤ
如何ニスベキヤ

十五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ スレドモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルヽモノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

明治四十四年十二月十一日印刷
明治四十四年十二月十四日發行
明治四十五年二月二十二日訂正再版印刷
明治四十五年二月二十五日訂正再版發行
大正四年十月二十五日訂正三版印刷
大正四年十月二十八日訂正三版發行

中等教科　現代文典改訂

上卷改正定價金貳拾八錢
下卷改正定價金貳拾七錢
大正六年度臨時定價金貳拾九錢

著作者　芳賀矢一
東京市神田區裏神保町九番地
發行兼印刷者　合資會社　富山房
同所　合資會社富山房社長
代表者　坂本嘉治馬
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　博信堂印刷所

著作權所有

發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　富山房
國電話本局一〇三六番本局四一三〇番
振替貯金口座東京五〇一番